

目白台に暮らした御家人たち	2
日本髪と櫛	4
元町小学校歴史展示室	6
令和7年度のあゆみ	7
資料をご寄贈くださった方々	8
令和8年度の催し	8



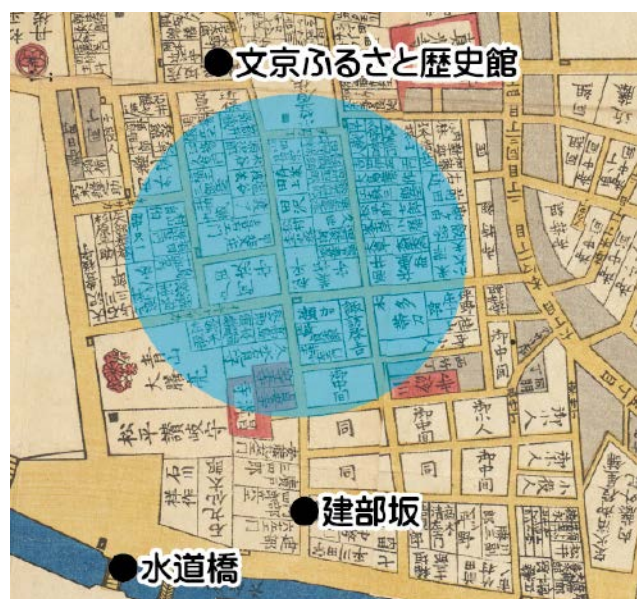
▲『雑司ヶ谷音羽絵図』（館蔵）

目白台に暮らした 御家人たち

文京区内には、水戸藩上屋敷内の庭園後楽園から採られた「後楽」や、近くに旗本建部家の屋敷があったことになむ「建部坂」など、区域が江戸時代に武士の街であったことを伝える痕跡が、地名として残されている土地があります。昭和40年（1965）前後におこなわれた住居表示の改正事業以前には、今よりも多くの“武士になむ地名”があり、その中には御家人と呼ばれる、下級武士になんだ地名もありました。例えば、現在も三組坂の名前を残す湯島三組町は、御小人、御中間、御駕籠之者という、三組の御家人職の武士が町屋敷地を拝領したことにちなんで、三組町と称されていました。

ちなみに、江戸時代の「町名」は“町人が住む土地の名前”であり、武士の居住地に町名はありませんでした。三組町の場合には、町人を住まわせることを特別に許可された拝領町屋敷地であったので、町名が付けられていました。一方で、本郷御弓町のように、正式な町名ではないものの、一般に知られている地名もありました。

御弓町とは、江戸時代初期にこの地に組屋敷地を拝領した、御先手御弓組の人々にちなんだ俗称でした【図1】。元禄16年（1703）末にあった火事の影響で、御先手御弓組の組屋敷は目白台へと移されましたが、御弓町の俗称はその後に残り、現在も町会の名称などとして使用されています。本郷御弓町は、現在の本郷一丁目、二丁目にまた



【図1】尾張屋敷「小石川谷中本郷」安政4年（部分）

※青いカケアミの範囲あたりが「御弓町」



【図2】『雑司ヶ谷音羽絵図』（部分）

※赤いカケアミが岡本家、青いカケアミが「古き友」、緑のカケアミが荒井小源太家

がる範囲の地名で、明治維新以後は主に本郷区弓町一丁目、二丁目となりました。本郷御弓町は、江戸時代を通じて武家屋敷地であり、多くの武士が居住しました。文京ふるさと歴史館では、文化11年（1814）から昭和43年まで本郷御弓町に住んだ、幕臣田村家の資料を常設展示などで紹介しています。

目白台に移された御先手御弓組の組屋敷周辺は、「新御弓町」と呼ばれました。御先手組与力で、算学者でもあった横井時信は、文化5年に解答を納めた市ヶ谷八幡の算額（算術の問題を記して奉納した額）に、「東都目白台新御弓町横井丈右衛門時信」と署名しています。

御先手御弓組与力を勤めた岡本昆石（1852-1927）は、遺稿となった「御先手与力の話」（『集古』昭和9年9月号掲載）で、目白台に住んだ同僚たちの様子を伝えています。それによると、御先手組与力の拝領屋敷は一戸300坪で、そこに玄関のある50坪程度の家屋を建て、馬が潜れる大きな門のある屋敷を構えていました。御先手組の組屋敷では、与力10騎という所では9騎が組屋敷に居住し、残りの1ヶ所は明地として確保されていたそうです。

御先手組には、組頭を勤める旗本の下に、御目見以下の御家人である与力と同心が所属していました。御先手与力は番士と呼ばれ、月に3～6回程度江戸城の門番所に出勤し、朝5ツ（午前8時頃）から翌朝の5ツまで丸一日の勤務でした。与力は、出勤するとまず前日の担当者との間で引継ぎをおこない、役人の登城時には並んで見張りや交通整理、夜6ツ（午後6時頃）以降は城門を閉めて翌朝まで交代で寝ずの番をおこなったそうです。

昆石は、「御先手与力の勤めでは裕福になることは出来

なかったらしいが質素に暮らしてみれば、内職も仕ないで一僕一碑を召使ツて安気に暮らして行ける」と書いています。仕事以外の御先手与力の生活については、「多くは閑暇にあくねて誹諧とか碁将棋とか又書画を描いて楽しむなど思ひ／＼好きな道に入つて遊んでゐた」と書き、「与力といふ者は気楽な身分であつた」と回想しています。

昆石は、別の文章「古き友」（自筆『何邪紋邪』国会図書館蔵）で、同じ目白台の組屋敷地に住んだ同僚として、岡田、高瀬、島田、館、服部、小島、脇屋、追沼の姓を挙げています。昆石の時代からは少し遡りますが、安政4年（1857）の尾張屋板『雑司ヶ谷音羽絵図』【表紙】には、昆石の縁者と思われる岡本正兵衛の家の近所に、岡田勇蔵、高瀬圓蔵、島田作左衛門、館伊蔵、服部儀十郎（別に服部幸太郎の名前もある）、小島与太夫、脇屋清助と、追沼以外は同姓の家を見つけることができます【図2】。

江戸の文人の住所録である『広益諸家人名録』（以下『諸家録』）は、天保7年（1836）の初編、天保13年の二編、文久元年（1861）の三編が出版されています。ここに掲載されている文人の中には、画家の岡田閑林【図3】や詩人の館柳湾（1762-1844）など、目白台に住んでいる人物が12人います【表1】。【図2】では、このうち岡田勇蔵（No.2、No.1の子）の名前が確認できるほか、館伊蔵（No.4の子）、脇屋清助（No.7の子）、小島与太夫（No.8の子）荒井小源太（No.9の父）の名前が確認できます。岡田、館、脇屋、小島の姓は「古き友」にも挙げられていることから、彼らが御先手組与力だったことも解ります。ちなみに、荒井小源太は御広敷添番として大奥で働き、『諸家録』に載る息子の小右衛門羽民も、安政5年に家督を継いで御広敷添番を勤めた御家人でした。

館柳湾の息子霞舩（俊蔵）は、始め絵を谷文晁の門人清水曲河に学び、曲河の没後は同門の岡田閑林から学んだと伝えられています。【図2】を見れば、岡田家は館家の道を挟んだ向かい側にあり、同門の上に近所でもあったこと

が解ります。柳湾は、息子の霞舩が開催した書画会において、自分と弟の巻菱湖が詩を、霞舩と閑林が絵を合作したことを、知人に伝えていました。閑林の孫の岡田勇蔵も鶴川と号する画家でしたが、「岡田は家絶へ」（「古き友」）と、昆石は岡田家が途絶えたことを短く伝えています。

「古き友」で挙げられた「小島」は、【図2】に見られる「小島与太夫」の息子、小嶋廉平を指すものと思われます。廉平は、嘉永4年（1851）に御先手組与力に仮採用されますが、同6年に昌平坂学問所の学問吟味に乙科合格し、安政元年に家督を継ぐと、甲府徳典館学頭など、出役（別の役職へ出向すること）として主に学問所関係の仕事を歴任しました。廉平は、董園の号で知られる詩人でもあり、明治維新後は忠廉と改名して、海軍省などに勤めました。廉平の弟喜四郎は、本郷御弓町の田村家の養子となり、後に御広敷番之頭に昇進して旗本格となり、幕末には荒井小右衛門の上司になっています。

『諸家録』に掲載されている小嶋庄五郎は、小嶋廉平の祖父にあたります。五湖亭貞房を名乗る画家として掲載される庄五郎は、歌川豊国の弟子で美人画を得意とした浮世絵師歌川貞房のことだと考えられますが、歌川国貞の弟子の歌川貞景を小嶋庄五郎とする説もあります。

目白台新御弓町の住人たちの様子を窺っただけでも、御先手与力を勤める御家人たちが、江戸城の城門を警固する武士の仕事の一方で、余暇の楽しみとして詩作や書画などを楽しんでいたことが伝わってきます。

文京ふるさと歴史館では、区制80周年を記念する令和8年度特別展として、令和8年11月7日（土）から12月20日（日）まで、「江戸の御家人 幕府を支えたサムライたち」を開催します。館蔵資料から、江戸幕府の実務を担当した御家人たちの、家と仕事を中心に紹介します。ぜひご来館ください。

（加藤 芳典）



【図3】岡田閑林『花鳥図押絵貼屏風』（部分）
板橋区立美術館蔵

No.	姓	号	通称	住所	分野	編
1	岡田	閑林	石輔	目白台組屋敷	画	初
2	岡田	鶴川	助太郎・勇蔵	目白台組屋敷	画	初・三
3	館	柳湾	雄二郎	目白台	詩	初
4	館	霞舩	俊蔵	目白台	画	初
5	黒川	丹壺	清助	目白台音羽二丁目坂上	篆刻	初
6	杉谷	素堂	鉄三郎	目白不動前	画	初
7	脇屋	章斎	省輔	目白台組屋敷	雑学	二
8	小嶋	貞房	庄五郎	目白台	画	二
9	荒井	羽民	小右衛門	目白台	画	二・三
10	館	霞外	仁三郎	目白台水荘	画	三
11	高野	驥台	菊太郎	関口目白坂	書	三
12	藤田	惇斎	啓次郎	目白台	書	三

【表1】『広益諸家人名録』に見られる目白台の住人

日本髪と櫛

人あれば髪あり髪あれば櫛もあるべし、されば櫛は鏡よりはさきにありし物とぞおもはるる

江戸時代の後期、弘化4（1847）年に刊行された『歴世女装考』の一節です。

ここに記されているように髪と櫛はどちらか一方だけを切り離せない、密接な関係を持っていました。

江戸時代以前の髪と櫛

櫛の歴史はかなり古く、日本での最古の出土例は縄文時代のものが確認されています。

古代の櫛は縦に長いたて櫛が主流で、女性は髪を頭頂部で一つに束ね、二つに折り曲げて中央を紐で縛った髪型をしており、髷の根本前部に櫛を挿して髪を固定していました。

飛鳥時代頃になるとたて櫛が衰退し、よこ櫛が主流となります。さらに平安時代以降は上流階級で垂髪が公式の髪型となると、櫛を髪に挿すことはほとんどなくなりました。しかし、桃山時代には遊女や女歌舞伎役者たちが男髷から影響を受けて再び髷を結び始め、江戸時代に入ると結髪の黄金期を迎え、見た目も美しく華やかな日本髪が多く生まれました。

日本髪の種類

日本髪は前髪・髷・髻（左右の横のあたりの毛）・髻（後ろのうなじあたりの毛）の4つの部位で構成されており、これらを組み合わせることによって様々な髪型が生み出されました。日本髪の種類は数えきれないほどありますが、概ね【図1】の4つの系統に大別されます。

①**兵庫髷**…後頭部に輪を作り、根本を毛先でぐるぐると巻いた髪型です。初期は遊女の間で結われ、その後一般に普及しました。元禄（1688-1704）頃に一度流行が下火になりましたが、髷を横に倒した横兵庫が現れ、両髷が大きく膨らんだ蝶の羽のような形になり遊女の間で再度流行しました。

②**島田髷**…東海道島

田宿の遊女発祥といわれる二つに折りたたんだ髷の中央を元結で締めた髪型です。江戸後期以降若い未婚女性の代表的な髪型となり、現在でも花嫁の髪型として文金高島田が残っています。

③**笄髷**…御殿女中が非公式の場で結った髪型です。下げ髪を笄にぐるぐると巻き付け、笄を抜けば下げ髪に戻り、すぐに公式の場に臨めるように工夫されています。歴史自体は4つの系統の中で最も古いですが、「笄髷」という名称で呼ばれるようになったのは寛文（1661-1673）頃です。

④**勝山髷**…遊女勝山が結った笄髷に似た屋敷風の髪型で、束ねた下げ髪を前方へくると曲げて輪を作っています。江戸後期には名称が「丸髷」となり、髷の幅が広がって丸みを帯びた形になりました。島田髷と対をなすように既婚女性の髪型として近代以降も長く結われた髪型です。

【図2】を見てみると女性たちの髪型がそれぞれ異なることに気づくと思います。この絵は接木された百種の菊を見物する人々の一部を拡大したものです。Aの女性は結綿



【図2】「百種接分菊」（一部拡大）

		16世紀末～17世紀	18世紀	19世紀
		慶長 元和 寛永 正保 慶安 承応 明暦 万治 寛文 延宝 天和 貞享 元禄	宝永 正徳 享保 元文 寛保 延享 寛延 宝暦 明和 安永 天明	寛政 享和 文化 文政 天保 弘化 嘉永 安政 万延 文久 元治 慶応 明治
兵庫髷系	唐輪髷		横兵庫	横兵庫（伊達兵庫）
島田髷系			投島田・大島田 辰松（文金）島田	つぶし島田
勝山髷系				丸髷
笄髷系	片外し		先笄	

【図1】代表的な髪型の登場時期 ※『江戸結髪史』をもとに作成。原則始点は女性の髪型として名称が書物等に現れ始めた時代を基準にしています。

(②)、Bの女性は片外し(③)、Cの女性は高島田(②)Dの女性は島田くずし(②・③)、Eの女性は丸髷(④)を結っています。結綿は若い女性が結った髪型で、髷の中央に手絡(てがら)(飾り布)を結んでいるのが特徴です。片外しは笄髷の代表で御殿女中が非公式の場で結った髪型です。高島田は結綿と同じ島田髷ですが、島田髷の中でも上品なものとされ、富裕層や上流階級の女性に好まれました。Cの女性は服装などからもBの女性と同じく屋敷勤めだと思われます。島田くずしは島田髷の毛先を笄に絡めたような髪型で年増や粹筋の女性が好みました。

このように一口に日本髪といっても年齢や身分、職業によって髪型は異なります。またその時代の流行によって同じ髪型でも形が微妙に変化しており、髷の構造は複雑化していきました。そのような髪型に対応するために櫛もまた発達し、日本髪を結うための櫛(結び櫛)が生まれました。中でもたて櫛〔註〕は日本髪を結うためには欠かせないものでした。

むさしやのつけ櫛

当館2階常設展示にあるつけ櫛はむさしや5代目当主富田正氏製作のものです。むさしやは文化2(1805)年創業と伝えられ、当時下級武士の内職の一つであったたて櫛を町方で初めて作ったといわれています。もとは妻恋神社(湯島2丁目)のあたりに店を構えていましたが、明治維新後は湯島天満宮唐門付近に移転しました。

つけは櫛の材料として古代より用いられ、万葉集の歌などにも詠まれています。比重が非常に重く弾力性に富み、油などの浸透性も良く、木目が緻密なため櫛のような細かい細工に適しています。しかしその分扱いも難しく、湿度が高すぎると腐食してしまい、反対に低すぎるとヒビが入って割れてしまいます。また、つけの中でも鹿児島県産(サツマ)、三宅島産(ミヤケ)の順に硬く最も高級となり、

御蔵島産(本島)もよく使用されますが前者に比べて木質が軟らかいため、耐久性はやや低くなるといえます。

以上のような性質からつけを加工するのは容易ではなく、特にたて櫛は歯の部分のみにしかカンナがかけられず、アシの部分は小刀やヤスリなどで少しずつ調整しなければならないため、よこ櫛よりも製作が難しいといわれています。そのため大部分は機械で作ることが多いですが、むさしやは全て手作業で行っていました。

たて櫛は毛筋立て【図3】と鬢出し【図4】の2つに大きく分けられます。毛筋立ては髪を毛筋を整えたり、アシの先で先に述べた4つの部位に毛筋を分けるのに使用します。基本の形は品川形と呼ばれ、品川に住んでいた甚吉という髪結いが発明したことに由来しています。それに対して歯の長い形は御殿形と呼ばれ、名の由来は御殿の女性たちが使用したからといわれています。歯の形にも違いがあり、ねずみ歯は細かい部分の調整に使われ、鬼歯は髪は表面に毛筋をつけて綺麗に見せるために仕上げで使用されました。

鬢出しは毛筋立てに比べて歴史は新しく、明治14(1881)年頃から使われ始めたといえます。鬢を膨らませるためのもので、始めは歯が2〜3本であったものがどんどん本数が増え、大きくなっていったそうです。際出しも鬢出しの一種で同様の用途で使われました。

今回は日本髪の種類と結び櫛について紹介させていただきました。展示をご覧になる際にはぜひ髪型や櫛の形などに注目してみてください。いつもとは少し変わった視点で楽しんでいただけるかもしれません。

(飯田 唯)

〔註〕江戸時代のたて櫛と古代のたて櫛は形状が異なる全く別個のものです。



【図3】 毛筋立て



【図4】 際出し 鬢出し

元町小学校歴史展示室



文京区と順天堂大学の協働事業である元町ウェルネスパークは、『歴史性に配慮しつつ、災害に強い、多世代が集えるにぎわいのある空間の創造』をコンセプトとした複合施設です。令和7年4月1日、旧元町小学校の敷地に建設されたこの施設内に、歴史展示室を開室しました。

旧元町小学校は、関東大震災で校舎が焼失したことから帝都復興事業のひとつとして本郷一丁目に移転・建設され、耐震耐火に優れた鉄筋コンクリート造の小学校です。この展示室は、建設当時（昭和2年・1927年）の普通教室を復原しています。また、当時の建築部材や校舎模型等を展示し、小学校のあゆみを映像やタッチパネル式のデジタルアーカイブで紹介しています。ぜひ、ご覧ください。

令和7年12月14日、文京区立元町公園開園式が行われました。これに併せて元町ウェルネスパークでは様々なイベントを催し、歴史展示室においては展示監修者の東京建築士会監修チームによるギャラリートークを開催しました。当日はあいにくの天気にもかかわらず、多くの方々にご参加いただきました。



所在地：文京区本郷一丁目1-19

元町ウェルネスパーク 東館3階

開室時間：午前9時～午後5時

休室日：年末年始（12月29日～1月3日）

※その他施設整備の保守・点検等で臨時休室することあり

入場料：無料

電話：03-5654-5715（代表）

交通：・JR中央・総武線 水道橋駅 徒歩5分

・都営地下鉄（三田線）水道橋駅 徒歩4分

・JR中央・総武線 御茶ノ水駅 徒歩9分

・東京メトロ（丸ノ内線）御茶ノ水駅 徒歩8分

・東京メトロ（千代田線）新御茶ノ水駅 徒歩11分

・B-ぐる（本郷・湯島ルート）東洋学園大学前

徒歩4分

令和7年度のあゆみ

小・中学生のための歴史教室

「ミリョクを発見！～お気に入りのオススメしよう～」

7月19日(土)～8月31日(日)

参加者数……139人

出張パネル展示

「近代の女子高等教育と文京」

2月17日(火)～2月23日(月・祝)

会場：文京シビックセンター1階アートサロン

参加者数……1,559人

文の京ゆかりの文化人顕彰事業

◆朗読コンテスト

応募総数……298人

本選11月2日(日) 会場：跡見学園女子大学プロッサムホール

課題作家：小泉八雲、徳富蘆花、夏目漱石

本選出場者数……15人 観覧者数……84人

◆歴史講演会

「夏目漱石が描いた文京区—『三四郎』を中心に—」

松下浩幸氏(明治大学教授)

2月1日(日) 会場：文京区民センター

参加者数……152人

◆史跡めぐり

「文京ゆかりの文化人の足跡を巡る 夏目漱石と東京大学」

12月4日(木)

参加者数……50人

ミニ企画

◆①3月26日(水)～6月22日(日)

「湯島から大塚へ—お茶の水女子大学の150年—」

◆②6月25日(水)～9月23日(火・祝)「季節の作品—夏—」

◆③9月25日(木)～12月27日(土)「空襲を生き抜いた建物」

◆④1月6日(火)～4月26日(日)「本郷の女子美—弓町から菊坂へ—」

史跡めぐり

◆「文京の女子教育の足跡を辿る①」10月30日(木) 参加者数……41人

◆「文京の女子教育の足跡を辿る②」2月19日(木) 参加者数……42人

◆「お茶の水界隈の近代建築を巡る」3月19日(木) 参加者数……45人

ワークショップ

◆「あなたの名所ものがたり—大原編—」

2月15日(日) 会場：大原地域活動センター

参加者数……2人



歴史教室ワークシート



出張パネル展示



歴史講演会



ミニ企画②



ミニ企画③



史跡めぐり

資料をご寄贈くださった方々 (五十音順・敬称略)

令和8年度の催し

*事業の開催日時や募集方法等は、歴史館ホームページ・「区報ぶんきょう」にてお知らせします。
ホームページ: <https://www.city.bunkyo.lg.jp/rekishikan>



小・中学生のための歴史教室

「くらべてみよう 今のどうぐと昔のどうぐ」

7月18日(土)～8月30日(日)

館内の展示を見ながらクイズに答えて、昔のくらしの中で使われた道具について学びます。事前申込不要、参加者には記念品をプレゼントします。

文化人顕彰事業 歴史講演会

文京ゆかりの文化人に関する講演会を予定しています。

文化人顕彰事業 朗読コンテスト

本選 11月1日(日) 午後1時～4時

会場: 跡見学園女子大学プロッサムホール

「旅する文学」と題し、伊藤左千夫、江戸川乱歩、谷崎潤一郎、夏目漱石、宮沢賢治の作品を朗読します。

ワークショップ

実施日: 12月6日(日) 午後2時～4時30分

会場: 男女平等センター

区制80周年記念特別展

「江戸の御家人 幕府を支えたサムライたち」

11月7日(土)～12月20日(日)

会場: 文京ふさと歴史館地下特別展示室

館蔵の田村家資料、服部家資料などの古文書から、江戸幕府を実務で支えた御家人たちの、家と仕事について紹介します。

特別展記念講演会

「幕臣における与力・同心について(仮)」

11月15日(日)

講師: 滝口 正哉氏(徳川林政史研究所特任研究員)

会場: 男女平等センター 定員: 100人(予定)、要事前申込

史跡めぐり

歴史館友の会まち案内ボランティアが、史跡等をご案内します。

参加費: 保険料40円程度・入館料等実費

常設展示ボランティアガイド

ふさと歴史館ボランティアガイドが、土曜・日曜・祝日の午後1時から5時まで、常設展示の解説を行います(申込不要・入館料のみ)。上記日時以外のご希望も受付けていますので、3週間前までに文京ふさと歴史館へ電話連絡し、申請書を提出してください。

※館内設備工事のため、令和8年12月末から令和9年2月末まで休館を予定しています。
ご迷惑をおかけしますが、ご理解のほどよろしくお願いします。

利用の案内

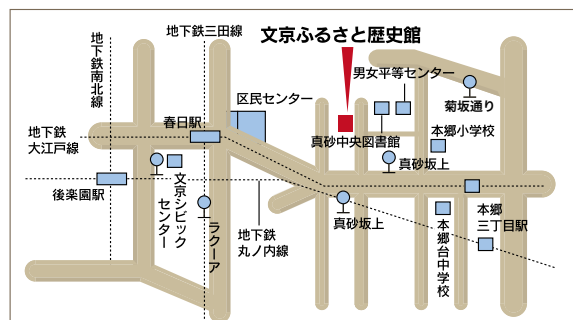
◆開館時間: 午前10時～午後5時

◆休館日: 月曜日・第4火曜日(休日にあたるときは翌日) 年末年始

◆入館料: 一般個人100円、団体(20人以上)70円
中学生以下・65歳以上無料
*特別展は別に定めます

◆交通: 東京メトロ丸ノ内線・都営大江戸線「本郷三丁目」から徒歩5分
都営三田線・大江戸線「春日」から徒歩5分
都営バス 都02 上69 「真砂坂上」から徒歩1分
Bーぐる「文京シビックセンター」又は「ラクーア」から徒歩10分、「菊坂通り」から徒歩6分

◆ホームページ: <https://www.city.bunkyo.lg.jp/rekishikan>



文京ふさと歴史館

〒113-0033 東京都文京区本郷四丁目9-29
電話 03-3818-7221